清沢満之と古代哲学
——明治前期における西洋哲学の初期受容の一側面——

西　尾　浩　二

はじめに

明治前期の西洋哲学の受容史を総合的に編むためには、デカルト以降の近世哲学（近現代の哲学）の受容だけでなく、中世哲学や古代哲学の受容の実態についても調査する必要がある。清沢満之と彼の同級生の高嶺三吉が残した東京大学時代の自筆の受講ノート（以下それぞれ「清沢ノート」「高嶺ノート」）には、近世哲学を内容とするフェノロサ「哲学史」講義（翻刻・翻訳が進み全貌が明らかになりつつある）のほか、ドイツ人の哲学者ブッセ（Ludwig Busse 1862-1907）による「古代哲学史」講義が含まれている。これは日本でなされたおそらく最初期の包括的な西洋古代哲学史の講義であり、したがって、それを筆記した清沢ノートと高嶺ノートは古代哲学の受容実態を調査する際の一次資料として学術的価値があると考えられる。清沢ノートの同講義全文の翻刻と翻訳はすでに終え、高嶺ノートに基づく校訂註を付して順次公開予定である（前半を『真宗総合研究所研究紀要』第37号、後半を同第38号に掲載予定）。

本稿[1]の目的は、西洋哲学の初期受容の一事例として、若き清沢満之が西洋古代哲学をどのように受容したのかを、清沢ノートを含む関連資料を用いて明らかにすることである。用いられる主要な資料は、ブッセ「古代哲学史」講義の清沢満之自筆ノート、同講義の高嶺三吉自筆ノート、清沢満之の自習ノート、シュヴェーグラー『西洋哲学史』の英訳本、清沢満之「西洋哲学史試稿」である。これらの分析と比較照合により浮かび上がるのは、工夫を凝らして口述による講義を筆記しつつ、教師の講義に飽き足らず、書物によって自ら積極的に知識を摂取しようとした明治の青年清沢満之の姿である。

1．ブッセ「古代哲学史」講義の概要

ブッセ「古代哲学史」講義の概要を、今回翻刻・翻訳した清沢ノートおよび参照した高嶺ノートに基づいて目次風に再構成すると、次のようになる（囲みの中

は高嶺ノートに記された関連日付とブッセ申報に記された時期）。

《講義の概要》

序論：哲学とは、哲学の問題、時代区分 ……… 2. Feb.（高嶺ノート History of Philosophy vol. Ⅰの日付による）第二学期（ブッセ申報による）

Ⅰ　ソクラテス以前の哲学

（1）イオニアの哲学者：タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネス

（2）ピュタゴラス

（3）エレア派：クセノパネス、パルメニデス、ゼノン

（4）ヘラクレイトス

（5）エンペドクレスと原子論者：デモクリトス（レウキッポス）、アナクサゴラス

（6）ソフィスト：プロタゴラス、ゴルギアス

Ⅱ　ギリシア哲学の隆盛 ……… 17. M.（高嶺ノートの日付）

1　ソクラテス

a）その生涯

b）その哲学

2　メガラ派、キュニコス派、キュレネ派：小ソクラテス学派

a）メガラ派

b）キュニコス派

c）キュレネ派

3　プラトン

a）その生涯

b）その体系 ……… 20. March/86（高嶺ノート History of Philosophy vol. Ⅱの日付）

（1）プラトンの対話法

（2）プラトンの自然学

（3）プラトンの心理学［魂論］

（4）プラトンの倫理学

（5）プラトンの政治学、政治理論

4　アリストテレス

a）その生涯

b）その体系

(1) 論理学
(2) 形而上学
(3) 自然学
(4) 心理学［魂論］
(5) 倫理学
(6) 政治学

Ⅲ　アリストテレス以後の哲学 ………… 第三学期（ブッセ申報による）

Ⅰ　エピクロスの体系
(a) 論理学
(b) 自然学
(c) 倫理学

Ⅱ　ストア派の哲学
(a) 論理学
(b) 自然学
(c) 倫理学

Ⅲ　ギリシアの懐疑主義

Ⅳ　新プラトン主義：ピロン、プロティノス …… 20. April. /86.（高嶺ノート History of Philosophy vol. Ⅲの日付）

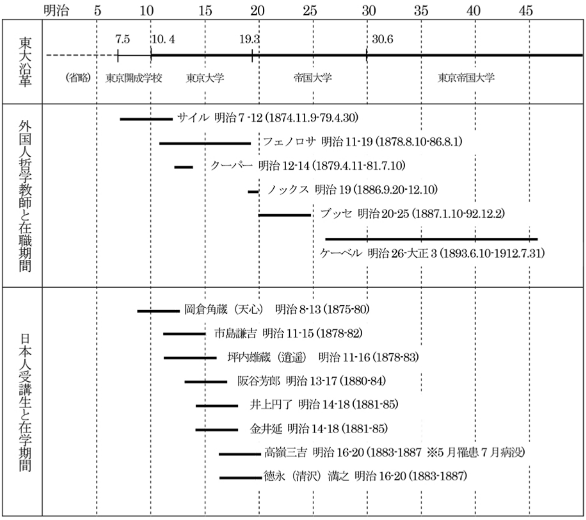
以上の概要は、ブッセが申報で報告している記述を具体的に裏付けるものである。たとえば明治19年度申報で、ブッセはこう記している（「文科大学年報　起明治二十年一月止明治二十年十二月」、下線は原文のまま）。

余ハ第二学期ニ於テ（中略）
第二年第三年両級ニハテールスヨリアリストートル迄ノ古代哲学ノ沿革ヲ講授セリ（中略）
第三学期ニ於テ（中略）
第二年級ニハアリストートル以後ノ哲学エピキューロス　ストイック学派希臘懐疑学及新プラトー学派ヲ講明シ加フルニデカルトヨリショーペンハウエルニ至ル近世哲学ノ大要ヲ摘梗ス（第三年級モ亦此級ニ合併教授セリ）

このようにソクラテス以前の哲学者から新プラトン主義までの包括的な西洋古代

哲学史を授業で扱ったのは、明治期に東京大学で哲学を講じた外国人教師（表[2]を参照）のうちでは、ブッセが最初である。ブッセ以前にもクーパーとノックスが古代哲学に関連する内容を授業で扱ったことがわかっているが、個別の論題であって包括的なものではない。すなわち、クーパーが修身学講義でアリストテレス『ニコマコス倫理学』を教科書に使用したこと、ノックスが倫理学講義の前半三分の一ほどをプラトンのイデア論、『国家』、倫理学等の解説に費やした（残りはスピノザとコントの哲学を論じた）ことがそれである。さらに遡ると、サイルもフェノロサも哲学の授業で古代哲学に触れることはほとんどなかったようである。

（表）明治期の東京大学外国人哲学教師と日本人受講生



そもそもフェノロサは、講義の方針として、古代哲学と中世哲学を日本人には益なしと見て哲学史の内容から省いていた（11 年度申報「古代希臘哲学並ニ希臘淵源ノ中世哲学ハ実際上日本人ニハ大益ヲ期シ難シト思惟シタルニ由リ之ヲ省ケリ」）。事実、彼の「哲学史」講義を筆記した受講ノートの内容は、ほぼデカルトから始まりヘーゲル、スペンサーに至る近世哲学の解説である。これに対してブッセは来日当初から古代哲学を（さらには翌年度からは中世哲学をも）省かずに講じたのである。

講義の開講時期は、ブッセが 24 歳の時に来日した明治 20 年（1887 年）1 月から、すなわち 19 年度の第二学期からである。同講義は 21 年度まで毎年度開講されたことが、残存するブッセの申報から確かめられる。おそらくその後も離職まで約 6 年間にわたって継続して開講されたのであろう。このうち清沢と高嶺が出席したのは、19 年度（1886 年 9 月～ 1887 年 7 月）の二学期から三学期（1 ～ 3 月、4 ～ 7 月）の授業、すなわち来日直後の授業である。

当時、哲学の授業は週 3 回あったらしい。清沢ノートに時間割と思われる鉛筆

書きの表（右参照）が残されている（「哲」の文字が水4、木4、土2に見える）。

（時間割:清沢ノート025-03）

土	金	木	水	火	月
○	東	○	審	易	審
哲	○	○	○	心	○
四	○	○	○	審	心
四	心	**哲**	**哲**	○	○
○	○	内	脳	○	○
○	精	内		精	○

哲学や哲学史の授業で用いた書（いわゆる種本か）として、ブッセはシュヴェーグラー、ツェラー、ユーバーヴェーク、ボウエンなどを挙げている（20，21年度の申報）。これらをミックスして用いたのだろう。

2. 清沢ノートと高嶺ノートの比較

清沢ノートと高嶺ノートを比較照合すると、いくつかのことが浮かび上がってくる。実際の作業では「古代哲学史」の英文全文について比較照合したが、紙幅の制約上、ここでは序論冒頭の二文のみを以下に示す。

清沢ノート（< > は翻刻者による挿入 ‸‸ は清沢自身による挿入）

Philosophy we call t<ha>t sc<ien>ce wh<ich> tries to find out t<he> final & t<he> highest principles of all being & happen<in>g & to derive from <th>em t<he> variety, na<tu>re, & purpose of th<in>gs. Philosophy t<he>refore nev<er> accepts wh<at> is given in experie<n>ce as it is given, b<ut> regards each particular fact only in rela<tio>n to a final principle & to ‸a‸ complete contempla<tio>n of t<he> world.

高嶺ノート

米 Philosophy ~~are~~ we called that science which is to find out finer and highest principles of all being and happenings & to derive from them the variety, nature, & purpose of things. Philosophy therefore never accepts what is given in experience as it is given, but regards each particular fact only in relation to the finer principle & to complete contemplation of world.

まず最初に気づかれるのは、二人のノートの記述がほぼ一致することである。このことを私は以前、資料調査の際に「内容から細かい言葉遣いに至るまで判で押したようにほとんど同じ」と表現した[3]。だが、実際に翻刻して比べてみると、それぞれのノートには特徴的な違いがあることもわかってきた。

大きな特徴として、清沢ノートは、誤記が少なく完成度は高いものの、単語の略記が非常に多い（tt → that, scce → science, wh → which, t → the の類い）。したがって序論一文目の書き出しは、実際には Philosophy we call tt scce wh tries と記されている（高嶺ノートは Philosophy we called that science which is）。これに対して高嶺ノートは、誤記が散見される（欄外や文中に付される×は要検討箇所の印、⋇は検討済みの印と思われる）が、単語の略記はほぼなく、ただし冠詞の the や a を省略する傾向にある。したがって二文目の文末は、to complete contemplation of world. と記されている（清沢ノートは to ‸a‸ complete contempla<tio>n of t<he> world）。こうした冠詞の省略や単語の略記は、すばやく書き取るための各自の工夫であろう。また比較的些細な相違点として、動詞の時制（現在・過去）や名詞の数（単数・複数）、数字の表記法、句読点の打ち方（種類や位置）などの違いも随所に見られる。

このようにほぼ一致するが違いもあるという両ノートの状況は、翻刻にあたって好都合であった。完成度のより高い清沢ノートにも欠落や不明箇所があり、また文字起こしの間違いもあり得るからである。実際、高嶺ノートとの比較照合によって初めて補われたり、修正されたりした箇所は少なくない。たとえば上記二文目の b<ut> regards は、当初 b<ecause> regarding と誤って起こされたのが高嶺ノートとの照合により修正されたものである。

ノートの比較からわかる異同は、次に見るように、当時の授業方法についても一定の示唆を与える。

3. 授業方法と筆記ノート

ブッセの授業方法はどのようなものであったか。ブッセは 19 年度申報でこう記している。

> 余カ講授ハ初メ口述ノ方法ヲ用ヒ須要ノ分部ハ学生ヲシテ筆記セシメタリシト雖トモ後余自ラ一写字器ヲ購求シテ余ノ筆記ヲ摺写シ之ヲ各学生ニ分付シ時間ノ徒費ヲ節スルコトトセリ
>
> 哲学演習ニハヒューム氏自然教問答ノ講究ヲ以テス即チ其方法ハ学生ヲシテ読書章中ノ意味ヲ口述シ而シテ之ヲ論議セシメタリ
>
> 倫理学演習ニハ学生ヲシテ各自特ニ知ラント欲スルノ説ヲ以テ分チ以テ各自ヲシテ自説ヲ詳細ニ陳述セシメ然ル後各説ヲ論議批評スルヲ務タリ

「演習」に見られる工夫も興味深いが、いま論題に関係する「講義」についてのみ取り出せば、「私の講義ははじめ口述の方法を用い、重要な部分は学生に筆記させたけれども、のちには私自身が写字器を買い求めて私の筆記をコピーし、これを各学生に配布して時間の浪費を節約することとした」というのである。

この授業方法によると、当初、学生はブッセがゆっくりと読み上げた要点をその場でノートに書き取っていったものと推測される。二人のノートの記述が酷似しているため、最初から教師か学生のノート類が回覧され写し取られたかのようにも見えるが、そうではない。

口述筆記の実証的裏付けが、実はノートのなかにある。わかりやすい例を以下に両ノートを対照する形で列挙する(【　】は写真資料の整理番号と頁の左右の別)。一例目では、清沢が final と書いた箇所を高嶺は finer と書き、二例目では、清沢が一度 sovereign と書いたのを消して solely と書き直した箇所を高嶺は thoroughly と書いている。三例目では、清沢が taught と書いた箇所を高嶺は told としている。四例目以下も含めてこうした異同の例は、文字を見てではなく音を聴き取って書いていたと考えないかぎり、説明がつかないであろう。

清沢	高嶺
【F025-04 右】tries to find out the final	【4-173】is to find out finer
【F025-05 右】~~sovereign~~ solely depends	【4-174 左】thoroughly depends
【F025-06 左】Anaximander taught that	【4-175 左】Anaximander told that
【F025-08 左】In the midst of all	【4-176 左】In the midst of world
【F025-09 右】but although Parmenides	【4-177 左】But also Paramenides
【F025-11 左】the opposite assertion	【4-178 右】the opposite assumption
【F025-11 右】it condemns itself	【4-179 左】it condences itself
【F025-12 左】mingling and immingling	【4-179 右】mingling and un-mingling
【F025-12 右】world where friendship	【4-179 右】world; were friendship
【F025-13 右】unmixed with	【4-181 右】&, mixed with
【F025-18 左】get at last	【4-189 右】get up the last
【F025-18 左】He set no great value	【4-189 右】He said, no great value
【F025-22 左】the sensitive things, or	【4-197 右】sensitive thing of
【F025-22 右】dialectic or philosophical knowledge	【4-198 右】dialectic of philosophical knowledge
【F025-30 左】The Athenians tried anew to	【4-208 右】Athenians tried and knew to
【F025-32 右】either be or not be	【4-211 右】either B or not-B
【F025-34 左】themselves. An Immediate	【4-214 右】themselves and Immediate
【F025-36 左】exists from ever	【4-217 右】exists forever
【F026-03 左】too ideal claims	【4-223 右】two ideal claims
【F026-06 右】The former hinder us	【4-228 右】The former hindrances

【F026-07 左】all others are false	【4-229 右】or other faul
【F026-08 左】the hall in which	【4-230 右】［×］whole in which
【F026-08 右】we can not help	【4-231 右】we can not have
【F026-10 右】these sceptic use(?)	【4-234 右】these Sceptic views
【F026-10 右】could get an influence	【4-234 右】can greatly influence
【F026-11 左】must be satisfied	【4-235 右】not be satisfied
【F026-11 右】consequences of all	【4-235 右】consequences. Of all
【F026-11 右】could not be touched	【4-236 右】could not be attacked
【F026-13 右】natal hour of the world	【4-239 右】［×］nator of our world
【F026-13 右】consequence of faux pas	【4-239 右】consequence often faux pas
【F026-14 左】became a peculiar individual thing	【4-239 右】became epicurean individual things

この最後の興味深い例は、新プラトン主義者プロティノスの学説の解説途中にあり、その一文は清沢ノートでは、The human soul too separated from the νους & became a peculiar〔高嶺：epicurean〕individual thing attached to material body. である。このように古代哲学史の全般にわたって、口述筆記の苦心の跡が見られる。口述の内容がうまく書き取れなかった箇所は、その後各自でノートに加筆修正が試みられた（痕跡がノートに残る）。

だが、ブッセは途中から「写字器」で筆記のコピーを刷って配布したのではなかったか。しかし配布していれば古代哲学史の終盤にまでこうした異同は生じないはずであろう。これは推測だが、コピーを配布したのは古代哲学史を講義し終えたあとのことだったのかもしれない。実はその後も三学期の授業は続き、申報（第1節参照）によれば、ブッセは新プラトン主義まで講義した後、デカルトからショーペンハウアーまでの近世哲学の概要を解説したらしい。にもかかわらず、その概要解説が今のところノートに見当たらない（高嶺ノートの続きにデカルトに関する図解が見える程度である）。この点も、まさにその時期（おそらく5月頃）から筆記のコピーの配布が始まったとすれば納得がいく。

4. ブッセ、シュヴェーグラー、清沢 —— 一つの作業仮説

ブッセの「古代哲学史」講義はその後の清沢にどのような影響を与えたのか（与えなかったのか）。清沢にとって、ブッセの講義は古代哲学を包括的に学ぶおそらく最初の機会であっただろう。最初に述べたように、フェノロサは古代哲学を哲学史から省いていたからである。だから古代哲学については、清沢がブッセから一定程度の影響を受けていたとしても不思議ではない。以下では、この点について考察する。

考察のための資料をもう一点、清沢ノートから付け加えたい。自習ノートである。清沢ノートには講義内容のほかに自習の跡らしきものが相当量含まれる。清沢より2年先輩の井上円了も多くの自習ノートを残しているように、当時の学生たちは授業に熱心に取り組む一方で、授業外でもよく勉強したのである。そのうち本稿で注目したいのは、Notes from Schwegler's History of Philosophy. という書き出しに始まるシュヴェーグラー『西洋哲学史』の抜粋ノート（【F073-F075】）である。ノート頁数で全128頁、その内訳は、哲学と時代区分4頁、古代哲学108頁、中世および近世哲学への移行期16頁である。つまり自習の目的は近世以外、特に古代哲学にあるといえる。

作成時期は不明だが、同書はブッセもフェノロサも使用した（と申報にある）ため、二つの可能性が考えられる。一つは自習ノート作成がフェノロサ「哲学史」講義の受講時だった可能性で、この場合、授業で扱われない近世以外を自習で補ったことになる。もう一つは自習ノート作成がブッセ「古代哲学史」講義の受講時だった可能性で、この場合、授業で扱われる古代哲学をさらに自習したことになる。

いま後者の可能性を選択し、一つの作業仮説を立ててみる。(1) ブッセがシュヴェーグラーなど複数の本を使って講義する、→ (2) 清沢がノートをとり、さらにシュヴェーグラーの英訳本から自習ノートを作成する、→ (3) これらは大学卒業後に清沢自身が真宗大学寮でおこなった「西洋哲学史」講義にも反映された――このようなストーリーの作業仮説である。この作業仮説の検証を通して、ブッセ「古代哲学史」講義がのちの清沢に与えた影響を測ってみたい。

5. 作業仮説の検証と結果

この作業仮説を検証するため、諸資料の記述を比較する。比較に用いる資料は次の四種類である。Dの「西洋哲学史試稿」は、清沢が自らの「西洋哲学史」講義に向けて準備したノートである。

A : ブッセ「古代哲学史」講義	清沢ノート【F025-06左】以下	明治20年
B : 清沢自習ノート	清沢ノート【073-16左】以下	作成時期不明
C : シュヴェーグラー『西洋哲学史』	James Hutchinson Stirling の英訳本[4], pp. 9-11	1867年（明治元年）
D : 清沢満之「西洋哲学史試稿」	岩波版『清沢満之全集』第4巻（2002年）、11-12頁	明治21, 2年頃起筆か

比較の範囲は、本稿では紙幅の制約上、また自習ノート全体も未翻刻のため、「ソクラテス以前のイオニア学派に関する記述」とする（次の比較対照表を参照）。

ソクラテス以前のイオニア学派に関する記述の比較対照表

A ブッセ「古代哲学史」講義 明治 20 年 清沢ノート【F025-06 左】～ 網掛け太字：C と共通	B 清沢自習ノート 作成時期不明 清沢ノート【073-16 左】～	C シュヴェーグラー『西洋哲学史』英訳 1867 年（明治元年） James Hutchinson Stirling 訳：IV章 網掛け太字：A, 下線：B, *太字斜体*：D	D 清沢「西洋哲学史試稿」 明治 21, 2 年頃起筆か 岩波版全集第 4 巻 *太字斜体*：C とほぼ共通
Thales: —— **The principle of all things is water; all come from water** by its **condensation & rar[i]<e>faction & to water all returns**. rar[i]<e>f Water cond air fire earth Water	Thales. 640-550B.C. "The principle (the first, the primitive ground) of all things is water; all comes from water, and to water all returns." The attempt to establish his principle in freedom from the mythic element, and so to introduce scientific procedure, — it is this, and not the principle itself, which procures for Thales the character of initiator of philosophy. He is the first that trod the ground of the interpretation of nature on principles of the understanding. The characteristics which the ancients relate of him certainly testify specially to his practical understanding.	***THALES. — At the head of the Ionic physicists, and at the head, therefore, of philosophy in general***, the ancients, with tolerable unanimity, place ***Thales of Miletus (640-550, B.C.)***, a contemporary of Croesus and Solon. ***The proposition*** to which he owes his place in the history of philosophy ***is this : 'The principle (the first, the primitive ground) of all things is water; all comes from water, and to water all returns.'*** ***This assumption***, however, in regard to the original of things, ***is no advance in itself*** beyond the position of the earlier mythical cosmogonies. Aristotle, in noticing Thales, speaks of several ancient 'theologians' (meaning, no doubt, Homer and Hesiod), who had ascribed to Oceanus and Tethys the origin of all things. ***The attempt, then, to establish his principle in freedom from the mythic element***, and so to introduce ***scientific*** procedure, ***— it is this***, and not the principle itself, ***which procures for Thales the character of initiator of philosophy***. He is the first that trod the ground of the interpretation of nature on principles of the understanding. ***How he made good his proposition cannot now be exactly determined. He was probably led to his hypothesis, however, by the observation that moisture constituted the germ and nourishment of things, that it developed heat, that it was in general the formative, life-giving, and life-possessing element. Then, from the condensation and rarefaction of his primitive element, he derived further, as it seems, the changes of things. The process itself he has certainly not determined with any greater precision.*** Such, then, is the philosophical import of Thales. A speculative philosopher in the more modern manner he assuredly was not, and philosophical literature being yet alien to the time, he does not appear, for preservation of his opinions, to have resorted to writing. In consequence of his reputation for ethico-political wisdom, he is included among the seven sages, and the characteristics which the ancients relate of him certainly testify specially to his practical understanding. It is reported of him, for instance, that he was the first to calculate an eclipse of the sun, that, in order to enable Croesus to cross the Halys, he effected a diversion of that river, and that he performed other similar feats. In regard to the statements of later authorities, that he had asserted the unity of the world, advanced the idea of a world-soul or of a world-forming spirit, taught the immortality of the soul, etc., these are to be regarded as beyond doubt but unhistorical transpositions of later ideas to a much less developed stand-point.	***ターレス氏(六四〇-五五〇)***小亜細ミレトノ人ナリ　***イオニア物命哲学者ノ祖ナルカ故ニ又哲学者全体ノ鼻祖ナリ*** ***氏ノ提唱セル所ハ「万有ノ原基ハ水ナリ　万物ハ皆各水ヨリ出テ〃水ニ帰ル」ト云フニアリ*** ***此ノ如キハ以テ哲学鼻祖ノ説ト為スニ足ラサルカ如シ***ト雖トモ決シテ然ラサル所以ヲ知ラサル可カラス　蓋シ従前ノ学者ハ未ダ自然的ニ万有ノ成立ヲ解釈スルコトヲ知ラス専ラ神話的ニ考想セシナリ ***然ルニ今***タレース氏ハ断然トシテ***此ノ如キ神話的解釈ヲ抛棄シテ物理的原理ヲ立テ〃***万有ノ成立ヲ説明***セントシキ是レ——科学的***論理的ニ宇宙ノ解釈ヲ企図セルモノニシテ実ニ***独立思想ノ開祖タルモノナリ*** 而シテ***氏カ万有ノ原基ヲ水ナリト為セル根拠ニ至リテハ未ダ甚ダ審ナラサルナリ*** ***或ハ氏ハ湿気ガ万物ノ発生生育ニ主要ナルヲ見、又温熱ノ湿気ヨリ発生スルヲ認メ其他一般ニ水ハ柔軟活動ノ原基ナルヨリシテ之ヲ万有ノ原基ナルト為セルモノ<ノ>如シト***云フ　***而シテ此本源的原基ノ凝集ト関散トニヨリテ万物ハ現起スト為セルカ如シ　然レトモ其精密ナル方法ハ氏ノ定説セサリシ所ナリ。***

	Anaximander.	2. ***ANAXIMANDER.*** — ***Anaximander of Miletus, who is described*** by the ancients ***sometimes as a disciple and sometimes as a contemporary of Thales, but who***, under every supposition, ***was somewhere about a generation younger than he***, endeavoured still further to develop the principle of the latter. ***He defined his primitive matter, in connexion with which he is supposed to be the first who used the term principle (ἀρχή), as the 'eternal, infinite, indefinite ground, from which, in order of time, all arises, and into which all returns,' as that which comprehends and rules all the spheres of the universe, but which, underlying every individual form of the finite and mutable, is itself infinite and indefinite.*** How we are to think this principle of Anaximander is a question in dispute. It was certainly not one of the four usual elements. As certainly, again, it was not something immaterial, but was probably conceived by Anaximander as primal matter not yet sundered into its individual elements, the *prius* in time, the chemical indifference of our modern elementary contraries. In this respect, such primitive matter is doubtless 'unlimited' and 'indefinite,' or neither qualitatively defined nor quantitatively limited. It is by no means on that account, however, to be regarded as a pure dynamical principle, as, for instance, the friendship and hatred of Empedocles, but only as a more philosophical expression for the thought which the ancients endeavoured to represent by the supposition of chaos.	*アナキシマンデル氏* (610-547) *又ミレトノ人ナリターレス氏ノ若友ナリシト云ヒ又彼ノ門下ナリシト云フ* *氏ハ万有ノ本元ヲ始メテ原基（プリンシプル）ト称シ其原基ハ混沌不定性ニシテ無限永存ノ一物質ナリトシ*之ヲ「アパイロン」ト名ケタリ　*而シテ万物ハ皆各*「アパイロン」*ヨリ出テ又時ノ順序ヲ追フテ之ニ帰ルモノナリト云ヘリ　乃チ*「アパイロン」*ハ万物ヲ包容スルモノナリ　万物ヲ支配スルモノナリ　而シテ諸般有限変化ノ定相ノ基礎タルモノナルカ故ニ自ラハ無限ニシテ不定ナルモノナリ*
Anaximander taught that the unfinished, ~~&~~ ‸**in**‸ **finite** & **indefinite ground** was the principle of all things, from which separate **the contraries of heat & cold**; then the air & the fire on the one hand, & the water & the earth on the other hand ἄπειρον (ap<e>iron) (Indefinite) heat　　cold air　fire　water　earth απειρον It is not certain [that if] <whether> that indefinite ground of Anaximander means an indefinite material or only the infinite extension.	Anaximander defined his primitive matter, in connexion with which he is ~~said~~ supposed to be the first who used the term principle (ἀρχή), as the "eternal, infinite, indefinite ground, from which, in order of time, all arises, and into which all returns."		
	Anaximander conceived the original contraries of heat & cold (as bases of the elements and of life) to separate from his primitive matter by virtue of an eternal movement immanent in it; and in this way it is clearly proved that his primitive matter is only the undeveloped, undivided potential being of these elemental contraries.	Accordingly, ***Anaximander conceives the original contraries of heat and cold*** (as bases of the elements and of life) ***to separate from his primitive matter by virtue of an eternal movement immanent in it*** ; and in this way it is clearly proved that his primitive matter is only the undeveloped, undivided potential being of these elemental contraries.	此「アパイロン」ハ*其内部ニ含蓄セリ運動性ヨリシテ第一ニ寒熱ノ反対作用ヲ分離発現スルナリ*
Anaximenes regarded the air as the final ground of all things; **the air which surrounds the whole world**, the air which we breathe in, is the principle as well of our own as of all lives; from the air rise by condensation the water & the earth and the animals on it, by rar[i]<e>faction the fire. Rar[i]<e>f　Air　Cond fire ~~air~~　water & earth Air	Anaximenes. He conceived the principle of the universe to be the "unlimited, all-embracing, ever-moving air," from which by rarefaction (fire) and condensation (water, earth, stone), everything else is formed.	3. ANAXIMENES. — ***Anaximenes, a disciple or a contemporary of Anaximander***, returned in some degree, to the fundamental views of Thales, in so far as he conceived the principle of the universe to be the ***' unlimited, all-embracing, ever-moving air,' from which by rarefaction (fire) and condensation (water, earth, stone), everything else is formed.*** The fact of **the air surrounding the whole world**, and of the breath being the condition of life, seems to have led him to this hypothesis.	*アナキシメネス氏*又ミレトス人ナリ　*アナキシマンデル氏ノ友人或ハ門下ナリ*シト云フターレス氏ノ水ハ麁顕ニ失スル所アリ　アナキシマンデル氏ノ「アパイロン」ハ不定ニ過クル所アリ　アナキシメネス氏ハ其中庸ヲ取リテ空気ヲ以テ万有ノ原基ナリトセリ　*空気ハ無限ナルモノナリ　万物ヲ包容スルモノナリ　常時ニ運動シテ止マサルモノナリ　此空気ハ稀散シテハ火トナリ凝集シテハ水、土、等ノ諸物トナル*　地界ハ平坦ノ円板ニシテ茫洋タル空気中ニ浮遊シテ宇宙ノ中心ニアリ天体ハ其周囲ヲ環行スト云
The Ionian philosophers have abstracted already in a certain degree from the material as it is given immediately in experience because they considered only one of the qualities perceivable by the senses or the indefinite material as the 1st principle of the other qualities which they derived from it ——	Retrospect. — The three earliest Ionic philosophers have thus, and to this their entire philosophy reduces itself, (a) sought the universal primitive matter of existence in general; (b) found this in a material substrate; and (c) given some intimations ~~of~~ in regard to the derivation from this primitive matter of the fundamental forms of nature.	4. RETROSPECT. — **The** three earliest **Ionic philosophers have** thus, and to this their entire philosophy reduces itself, (a) sought the universal primitive matter of existence in general ; (b) found this in a material substrate ; and (c) given some intimations in regard to the derivation from this primitive matter of the fundamental forms of nature.	

検証結果は次のとおりである。

①Ｃから A への反映〔A, C の網掛け部分〕

シュヴェーグラーからブッセへの反映はわずか（ほぼタレスに関する引用のみ）である。ブッセはシュヴェーグラーをあまり使っていないと見える。

②Ｃから B への反映〔C の下線部分〕

シュヴェーグラーから清沢自習ノートへの反映は多い（WORD 文字カウントによる単語数 C 欄：863 語、B 欄：281 語）。清沢自習ノートはシュヴェーグラーの約三分の一（281/863 = 32.6%）を引用している。

③Ｃから D への反映〔C, D の太字斜体部分〕

シュヴェーグラーから清沢「試稿」への反映は非常に多い（D 欄 931 語中 638 語）。清沢「試稿」の当該範囲は約三分の二（638/931=68.5%）をシュヴェーグラーに依拠している。

④ A から D への反映

ブッセから清沢「試稿」への反映は実質的にほぼないと言ってよい。A と D が重なるように見えるわずかな箇所〔D の網掛け部分〕も、A 由来のものではなく C 由来のものであろう。「試稿」作成時に清沢はブッセの受講ノートをほとんど参照していないと推測される。

範囲を絞ってのサンプル調査であるため決定的ではないが、この検証結果が示唆するのは、ブッセの「古代哲学史」講義が清沢の「西洋哲学史」講義に与えた影響が非常に限定的であった可能性である。ブッセの講義は清沢にとって古代哲学を全般的に学ぶきっかけとはなったであろうが、それ以上ではなかったかもしれない。若き清沢の古代哲学受容は、講義と書籍の少なくとも二つの経路によってなされた。だが、のちの影響という観点から見れば、後者の経路の方がより太いと推定されるのである。

むすび

清沢満之は東京大学で高嶺三吉ら学友とともに、ドイツ人哲学者ブッセより包括的な西洋古代哲学に関する講義を受けた。講義は口述の方法でなされ、清沢たち学生はそれぞれに工夫を凝らしながらノートに筆記した。また、授業外ではシュ

ヴェーグラー『西洋哲学史』の英訳本等を用いて自習に励み、同書は卒業後の清沢が「西洋哲学史」講義を準備する際にも参照された。若き清沢の古代哲学受容は、このように講義と書籍の少なくとも二つの経路によってなされたのであるが、本稿での検証結果によるかぎりでは、のちの影響という観点から見れば後者の経路の方がより太いと推定され、他方ブッセの講義がのちの清沢自身の講義に与えた影響は非常に限定的であったという可能性が示唆される。とはいえ、このことはむろん、西洋哲学の受容史におけるブッセ「古代哲学史」講義の意義や、それを筆記した清沢ノートと高嶺ノートの資料価値を減じるものではない。

＊本研究はJSPS 科研費 JP18K00024 の助成を受けたものである。
なお、資料については、筆者に直接ご照会ください。

註

1　本稿は井上円了研究センター第1回合宿研究会（2018 年 12 月 8 日〜 9 日、於：東洋大学熱海研修センター）での口頭発表に基づく。発表の機会と有益な助言をいただいたことに対し謝意を表したい。

2　この表は、西尾浩二「明治前期の東京大学外国人哲学教師の資料調査――日本における西洋哲学の初期受容に関する調査・分析のために――」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第 29 号、2012 年、59-120 頁）、62 頁による。本節で述べるブッセ以外の授業内容についても同論文による。残存する 3 年分のブッセ申報の全文は、同論文 94-102 頁を参照。

3　同論文 80 頁。

4　Albert Schwegler, *Handbook of the History of the Philosophy*, tr. James Hutchinson Stirling, Edinburgh: Edmonston&Douglas, 1867 : Chapter Ⅳ .

（にしお　こうじ・大谷大学）